



企画展  
読み継がれた  
源氏物語

2020年  
11月8日(日)～12月13日(日)



## 展覧会概要

『源氏物語』は、現代に至るまで千年にわたり読み継がれてきた古典の名作です。その作者である紫式部による日記『紫式部日記』には『源氏物語』の成立に関わる場面が記されており、平安時代、一条天皇を中心とする宮廷生活のなかで、いかに『源氏物語』が生まれ、享受されたかがわかります。

『源氏物語』は、壮大な長編物語にもかかわらず、多くの人々によって幾度となく書き写され、数多くの注釈書が著されるとともに、絵画化も図られました。後世の文学作品に多大な影響を与えたばかりでなく、和歌や能楽、茶道、香道といった日本文化にもその片鱗を見いだすことができます。

本展では、東京・五島美術館蔵の国宝「紫式部日記絵巻」を特別公開するとともに、宮内庁三の丸尚蔵館や個人所蔵の源氏絵の名品を併せて展示し、日本が世界に誇る『源氏物語』の文化史をたどり、その魅力を紐解きます。

## 展覧会基本情報

- ◆展覧会名 企画展 読み継がれた源氏物語
- ◆会場 名古屋市蓬左文庫展示室
- ◆会期 2020年11月8日(日)～12月13日(日) ※前期:11/8-25 後期:11/26-12/13
- ◆開館時間 午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- ◆休館日 月曜日(但し、11月23日(月・祝)は開館、翌23日(火)は休館)  
年末年始:2020年12月14日(月)～2021年1月4日(月)
- ◆観覧料 一般1,200円 高・大生700円 小・中生500円  
※20名様以上の団体は一般1,000円 高大生600円 小中生400円 ※毎週土曜日は高校生以下無料
- ◆出展作品数 48件 ※期間中一部展示替えあり
- ◆特別公開 11月8日(日)～25日(水)  
国宝 紫式部日記絵巻 第一段・第二段 五島美術館蔵  
11月26日(木)～12月13日(日)  
国宝 紫式部日記絵巻 第三段 五島美術館蔵 / 国宝 源氏物語絵巻 橋姫 徳川美術館蔵
- ◆主催 徳川美術館 名古屋市蓬左文庫
- ◆協力 名古屋市交通局

## プレス内覧会

2020年11月7日(土) 午後1時30分～2時30分

会場:徳川美術館 講堂

内容:展覧会担当学芸員による概要説明の後、展示室にて自由取材

## 第一章 紫式部と

### 「紫式部日記絵巻」

『源氏物語』の作者である紫式部（九七三頃～一〇一四頃）は、時の権力者・藤原道長（九六六～一〇二七）の娘にして一条天皇（九八〇～一〇一）の中宮となつた藤原彰子に仕えた女房でした。その宮仕えの日々を回顧録として綴つたのが『紫式部日記』です。そこには彰子の出産、男子誕生という晴れの出来事が、優れた観察眼でいきいきと描き出されています。実は『源氏物語』の作者が紫式部であることも、この日記から判明します。紫式部は自ら『源氏物語』を「源氏の物語」の名で幾度も記し、道長や藤原公任、そして一条天皇までもが『源氏物語』に親しんだことに触れています。

この日記を題材とした国宝「紫式部日記絵巻」は、十三世紀前半に製作されたと考えられています。藤原道長・彰子を中心とした王朝文化の最盛期が、この頃にはすでに憧憬の対象となつていたことを示す重要な作品です。『源氏物語』と『紫式部日記』が後世に与えた影響は大きく、このふたつがともに今に伝わっていることもまた貴重です。

## 『紫式部日記』

紫式部は受領階級出身でありながら、当時執筆中であつた『源氏物語』の評判を聞き付けた藤原道長の求めにより、一条天皇妃である中宮彰子の女房として1005年（寛弘2年）から宮仕えの身となつた。『紫式部日記』は宮中生活を送っていた1008年（寛弘5年）秋から1010年（寛弘7年）正月にかけての、中宮彰子の出産をはじめとする様々な出来事や、紫式部の個人的な想いを書き記した日記である。正史には残らない当時の人々の風習や言動などが記されており、史料的价值も高い。

「消息文」と呼ばれる手紙の文体で書かれたパートには、同時代を生きた才女たちの批評も書かれ、特にライバルと評される清少納言への痛烈な批判は有名。対照的な個性を持ったふたりであつたことが窺い知れる興味深い資料である。

## 特別公開 国宝「紫式部日記絵巻」と国宝「源氏物語絵巻」

11月8日(日)～25日(水) 公開



国宝 紫式部日記絵巻 第一段 絵  
五島美術館蔵

寛弘5年10月17日の月が美しく照り輝く頃、藤原実成と藤原齊信が昇進のお礼を中宮に啓上する途中、渡殿の東端の宮の内侍の部屋に立ち寄り、格子を押し上げながら「いらっしゃいますか」と声をかけている。格子から覗く女性は紫式部本人であるとされ、二千年札の図案にも採用された場面である。



国宝 紫式部日記絵巻 第二段 絵  
五島美術館蔵

寛弘5年11月1日、若宮（敦成親王）の誕生五十日目の祝いに、美しく着飾つた女房たちが参内する。画面上部で若宮を抱くのは中宮彰子、その前には女房である幸相の君が給仕した御膳が並べられている。

11月26日(木)～12月13日(日) 公開



国宝 紫式部日記絵巻 第三段 絵  
五島美術館蔵

紫式部が仕える中宮彰子と一条天皇の間に生まれた敦成親王の生後五十日の祝宴ののち、中宮付の女房に戯れかける酔い乱れた公卿たち。藤原公任が「あなかして、このあたりに若紫や候（恐れいりますが、このあたりに若紫はいらっしゃいませんか）」と酔った顔をのぞかせる。



国宝 源氏物語絵巻 橋姫 絵  
徳川美術館蔵

霧が立ち込める風情ある月夜、宇治を訪れた薫は透垣の向こうから姫君たちを垣間見る。琵琶の前に置く可憐な中君と、琴の上に前かがみになる落ち着いた大君が、雲間から急に明るく差し出した月に照らされた。本場面は巻物装束修理後初公開となる。

## 第二章 『源氏物語』の読み継がれた『源氏物語』——伝本と注釈

『源氏物語』は、かなりの長編にもかかわらず、当時から評判を得て愛読され、数多くの写本が作られました。しかし、転写を重ねるうちに、次第に意味の通らない部分も出てきました。こうした本文の乱れを校訂した人物が鎌倉時代初めの藤原定家と源光行・親行の親子です。この頃から多くの注釈書が著されるようになり、また和歌の詠作に必須の書とされたことで、古典としての『源氏物語』の権威が高まりました。

印刷技術が向上した江戸時代には、山本春正の『絵入源氏物語』の出版を契機として、それまで上層階級に限られていた読者層が一気に

広がりを見せ、北村季吟の『湖月抄』、また本居宣長の『源氏物語玉の小櫛』など優れた注釈書も生み出されました。

連綿と受け継がれてきた先人たちの研究は、今も『源氏物語』を深く解く上で大きな影響を及ぼしています。



源氏物語 河内本  
名古屋市蓬左文庫蔵  
全帖が散逸せずに残った最古の『源氏物語』である。校訂者は父子ともに河内守であった源光行（1163～1244）と親行（生歿年未詳）。巻末の北条実時（1224～76）の識語から、正嘉2年（1258）に実時が親行の河内本を借りて書写させたと考えられてきた。しかし、近年では光行らが校訂に用いた原稿本である可能性が高いと指摘されている。



源氏物語（青表紙本系） 三条西家本附 桐時絵重箱型本箱  
名古屋市蓬左文庫蔵  
室町時代を代表する『源氏物語』研究の第一人者・三条西実隆（堯空 1455～1537）が奥書を記した青表紙本系（藤原定家が校訂した写本の系統）の写本である。『夢浮橋』の帖末に、天文2年（1533）6月、実隆の孫・実世（実枝 1511～79）が男女を総動員して書写を完成させたことと記されている。

## 第四章 『源氏物語』の拡がり



上下とも：修紫田舎源氏  
柳亭種彦著・歌川国貞画  
名古屋市蓬左文庫蔵

## 第三章 源氏物語の絵画と江戸の源氏絵



源氏物語画帖 絵 土佐光則筆

て、数多くの源氏絵の作例が遺されています。

室町時代には、描かれる場面がある程度固定化し、季節感に富んだ、おめでたい場面が選ばれる傾向になりましたが、その時々々の新たな解釈によって場面選択やその表現は多様化を遂げました。とくに江戸時代には源氏絵の作例が飛躍的に数を増します。源氏絵を得意とした土佐派だけでなく、狩野派をはじめ多くの流派が手がける画題となり、絵巻のほか屏風・画帖・色紙・扇面・版本挿絵などあらゆる画面形式で描かれ、多彩な世界が生み出されました。



源氏物語図屏風 狩野永岳筆 六曲一双の内左隻  
宮内庁三の丸尚蔵館蔵

『源氏物語』に取材した図を二場面ずつ各隻に描き、二扇ごとに縁取りをした復古様式の屏風。右隻は「紅葉賀」「湊標」、画像の左隻には「湊標」「松風」に取材した一場面が、右から左へ季節の順に配置されている。

『源氏物語』は、王朝文化を余すところなく描き出した文章の美しさに加え、登場人物の巧みな心理描写、そして和漢の文学や諸芸能、仏教を踏まえた多様な世界観により、男女を問わず、多くの人々を魅了しました。後世の文学作品に多大な影響を与えたばかりでなく、能楽や香道・茶道といった日本の芸能やそれに付随する美術工芸にもその片鱗を見いだすことができます。

一方、個性豊かな女性が多く登場する『源氏物語』は、女性の振舞いや生き方を示す教養本とされ、婚礼調度の意匠にも採用されました。

『源氏物語』の大衆化が進んだ江戸時代後期には、柳亭種彦による翻案本『修紫田舎源氏』が人気を博し、浮世絵の画題ともなりました。こうした二次創作物の盛況は現代まで続き、原典を読まずとも『源氏物語』の世界に触れる機会は今も少なくありません。『源氏物語』は千年前から日本の文化の中を脈々と流れ、現代まで生き続けている古典中の古典として稀有な存在なのです。



合貝



左：香木 銘紅葉賀 六十一種名香の内  
右：香木 銘花散里 六十一種名香の内

## 展覧会関連イベント

### ◆担当学芸員の見どころガイド

日時： 11月23日（月・祝）午後1時～（30分程度）  
会場： 徳川美術館 講堂  
定員： 先着60名 ※入館者参加自由（入館料別途要）

### ◆土曜講座『源氏物語絵巻 桐壺』を読み解く』

講師： 吉川 美穂（当館学芸部部長代理）  
日時： 11月14日（土）午後1時30分～3時  
会場： 徳川美術館 講堂  
定員： 60名 受講費：空席がある場合受講可、当日料金600円



© 2019「十二単衣を着た悪魔」フィルムパートナー

### ◆映画『十二単衣を着た悪魔』（11月6日（金）より全国ロードショー） タイアッププレゼントキャンペーン

企画展「読み継がれた源氏物語」開催期間中、徳川美術館館内に設置された応募箱にご応募いただいた方の中から抽選で、出演俳優のサイン入りオリジナルグッズを4名様にプレゼントいたします。

サイン入りポスター・・・1名さま

サイン入り非売品パンフレット・・・3名さま

<エピソード>

- ・2018年、映画の構想段階にあった黒木瞳監督が、国宝「源氏物語絵巻」の特別公開を来館取材されました。
- ・オープニング、劇中の小道具等で当館所蔵の国宝「源氏物語絵巻」が登場し、世界観を盛り上げています。
- ・当館は本作品の美術協力をさせていただきました。

監督：黒木瞳 原作：内館牧子 出演：伊藤健太郎 三吉彩花  
11月6日（金）より全国ロードショー

## 視聴者・読者プレゼント提供

企画展「読み継がれた源氏物語」を、ぜひ御社媒体にてご紹介ください。画像を1点以上使用してご紹介いただいた場合、視聴者・読者プレゼントとして本展覧会の御招待チケット（非売品）を、1媒体5組10名様にご提供いたします。



## お問い合わせ 取材は随時お受けいたします



徳川美術館  
The Tokugawa Art Museum



〒461-0023 名古屋市東区徳川町1017  
TEL：052-935-6262（10時～17時受付）  
052-935-8222（営業時間外受付）  
FAX：052-935-6261

[報道関係対応窓口] 徳川美術館 管理部  
吉川 由紀 yuki@tokugawa.or.jp  
竹内 大知 d.takeuchi@tokugawa.or.jp



企画展 読み継がれた源氏物語

広報画像申請書 使用期間：～2020年12月13日



No.1  
源氏物語絵巻 桐壺  
江戸時代 明暦元年(1655)  
個人蔵



No.2 ※No.1と同作品、部分拡大  
源氏物語絵巻 桐壺(部分)  
江戸時代 明暦元年(1655)  
個人蔵



No.3 ※WEB媒体掲載不可  
国宝 紫式部日記絵巻 第一段 絵  
鎌倉時代 13世紀  
五島美術館蔵  
(11月8日～25日公開)



No.4  
国宝 源氏物語絵巻 橋姫  
平安時代 12世紀  
徳川美術館蔵  
(11月26日～12月13日公開)



No.5  
源氏物語(青表紙本系)  
三條西家本  
附 桐蒔絵重箱型本箱  
室町時代 天文2年(1533)  
名古屋市蓬左文庫蔵



No.6  
修紫田舎源氏  
柳亭種彦著・歌川国貞画  
江戸時代  
文政12～13年(1829～42)  
名古屋市蓬左文庫蔵

使用媒体

放送日・発売日

プレゼント提供 希望する ・ 希望しない

貴社名

ご担当者様

データ送付先アドレス

ご連絡先電話番号

[ご利用にあたっての注意事項]

- ・画像のご利用は本展覧会の紹介用途のみに限ります。
- ・部分アップのトリミングは可能ですが、色変更等の加工はご遠慮ください。
- ・二次利用不可です。
- ・画像には最低限「タイトル」と「所蔵」のクレジットを明記してください。
- ・内容確認のための校正原稿をお送りください。
- ・ご掲載誌、DVD等を1部「徳川美術館 管理部 広報宛」でお送りください。



〒461-0023 名古屋市中区徳川町1017

TEL: 052-935-6262 (10時～17時受付)

052-935-8222 (営業時間外受付)

FAX: 052-935-6261

担当: 吉川 yuki@tokugawa.or.jp

竹内 d.takeuchi@tokugawa.or.jp